天使と一緒にネギま！

なおぽん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
天使と一緒にネギま！

【Ｎコード】
Ｎ６６０４Ｚ

【作者名】
なおぽん

【あらすじ】
ごく普通のゲーオタだった少年はゲーオタだったが為に死んだ。天使との出会いを経て、少年はネギま！へとその舞台を移した。

魔法先生ネギま！の二次創作ものです。妄想爆発です。「小説」として見れない部分も多々あると思いますが、それでもよろしければどうぞ。

スターオーシャン、ワイルドアームズ要素あり。主に技。主要キャラは引っ張ってきません。警告タグは該当描写が出てきたら追加。

誤字脱字、または他作品と似た設定や描写があればご一報いただければ幸いです。

第0話　俺死んだんだとさ

俺の名前は高橋一（たかはし はじめ）。中学3年生だ。つい今し方やり直したSO3をクリアした。ディレクターズカットの方な。やっぱこれは名作だと思う。WA―（1，：F）、もな。

さて、休憩がてら何か飲みに行こうかな。そう思い部屋を出て、階段を下りようとするが。

「あ、やべ……」

突然のめまいにバランスを崩し、俺は階段から転げ落ちた――。

「う、ん……」

あれ、俺何でこんなとこで寝てんだろ。

……あぁ、階段から落ちたんだっけか、って体が痛くないや。仰向けに倒れたまま少し体を動かしてみたが、特に痛い個所はなかった。俺スゲーと思いつつ体を起こすが……。

「幽体離脱うううう！？」

なんと立ち上がった俺の眼下には未だ寝たままの体が転がっているのだ。ふくらはぎから下は寝たままの俺の体に重なっており見えなくなっている。……おいおい、これはなんの冗談だ？　動揺しながら辺りを見回す。

「やほっ」

玄関口に片手を上げた少女がいた。

「……誰？」

「うん、僕天使」

天井へと視線を向ける。一度落ち着こうか。

「ちょっとー、無視しないでー」

少女がそう言ってくる。無視し続けるのも本意ではないので仕方なく視線を戻すと、既に眼前まで迫って来ていた。近い近い近い！

間近で見た少女の顔は可愛かった。小顔だが若干ふっくらとしていて、たれ目気味だがくりくりした目が愛らしく、ちょこんと乗った鼻は思わずつんつんしたくなる。眉上、肩上で切り揃えられた黒髪は彼女が歩くたびにふわりと靡き、見ただけでさらさらしていると分かる。俺が無視したことにご立腹なようでアヒル口を強調するかのごとく突き出している。怒っていても柔らかい雰囲気が好印象だ。というかむしろ俺の方が頭一つ分高いせいで可愛いとしか思えない……って何を冷静に分析してるんだか。話を戻そう。

「んで、その天使さんが俺に何用？　不法侵入だぞ」

天使に不法侵入もくそもないか。言ってて思った。

「んっとねー、まず今僕たちがいるこの空間は現実世界の時間軸から外れてる。何故なら、君は悪魔に干渉され死亡してしまい、このままだと悪魔の餌になってしまうから！」

少女は手を胸の前でグッと握りしめ斜め上を向いた。とりあえずスルー。

「ざくざくいくよー。君ってゲーム大好きで怠惰が好きでめんどくさがりじゃない？　そういう今時の人って総じて悪魔受けするの。美味しく頂ける感じで」

おーい。なんじゃそりゃー。つーかこいつ、言葉の節々からなんとなくこっち方面の臭いがする。……（自称）天使のくせに。

「んでんで、君もその例に洩れず目を付けられちゃってー、でゲームクリアした達成感で魂も旨味が増して尚美味しそうだったからめまい起こされて殺されちゃいました。ちゃんちゃん」

「ちゃんちゃん、じゃねーだろコラ」

「でー、死んじゃった君の魂はまさに悪魔に喰らわれようとしていた。しかしそこに間一髪僕が間に合ったのだ！　ねー褒めて褒めてー」

俺のツッコミをナチュラルにスルーして話し続け、挙句これでもかというほど露骨に頭を差し出してくる。っくそ、ムカつくのに無駄に可愛いなこいつ。

「あー……よしよし」

「えへへー。でね、一度天使に保護された人はもう悪魔には干渉されなくなるんだけど、君が死んじゃったことは変えられない事実なんだー。だから君にはこれからのことを決めてもらわないといけないのだ」

おー、なんか真面目な話っぽいぞ。姿勢を正そうと手を引っ込め

ようとした時のまだ撫でてもらいたそうな顔のせいで緊張感はかけらもなくなったが。

「これから、っつーと？」

「転生してまた新しい生を始めるか、別の世界に行くか、かな」

「……具体的には？」

「転生なら、前世の記憶無しで生まれ変わりだね。でもその場合天使の加護は解除されるから同じように悪魔からの襲撃が考えられるよ。君が君であることには変わりないが故に、同じような人格形成が予想されるからだね。

別の世界っていうのは、平行世界のこと。漫画でもゲームでも何でも、平行世界として扱われるよ。この世界には神と天使、悪魔がいるけど、伝説上の存在と言われているように表には出て来ないし秘匿も徹底する分表面上は平和な世界だよね。とは言ってもそれは人間社会での一般的な話でしかなくて、実際には君も経験したように見えないところで悪魔も天使も動き回ってるんだけどね。それに比べて、分かってると思うけど平行世界には比較にならないくらい危険が有り触れてる。更に世界移動した代償として一度死んだら無に帰すことになるよ。

とは言っても、天使として君を未然に悪魔から守れなかった以上最大限強化はする。簡単に言えば損害賠償だね。まぁ、君ならどっちを選ぶかは分かりきってるけどねー」

まぁな。どうせ一度死んじまったんなら、あとはやりたいことやるさ。

「ネギま！の世界に行きたい」

「ネギま！だねー。大丈夫だよー。修正力、イレギュラーの有無はどうするー？」

「両方無しで」

「分かったー。持ちたいスキル・アイテムは？」
「ＳＯ３・ＷＡのものを持って行きたい。ディレクターズカット、ＦＦ含めてな」
「ふんふん、じゃあパラメータをＳＯ３式、術技は両方、装備品・アイテムは任意で設定ってことにしとくねー。あとカンストはないから自由に鍛えてもらって構わないよ。不老はデフォだよ」
「分かった」
「じゃあ、もうないかな？　ないなら送っちゃうよー」
「ちょっと待った。俺が世界移動したとして、この世界での俺はどうなる？」

さすがにいままでの１８年間を簡単に忘れられるほど冷めてない。

「うん、ちゃんとそういうこと言える人は好感が持てるよ。
世界を移動するということはこの世界から君という存在が消えるということ。つまり、地球上の全てのものから君という存在が消えることになる。君がネギま！の世界に移動したら、この肉体も処理させてもらうことになる」
「そう、か……」

予想の一つではあったが、やはり堪えるものがあるな……。
とはいえ、俺はもう死んじまった身だ。悲しまない人がいないだけ幸せなのかもしれない。

「もう他にはないかな？」
「いや、あと二つだけ。……君の名前は？」

すんごい恥ずかしいし緊張するが、一つだけ聞いておきたいことがある。

「僕ー？　僕はねーニアっていうんだー」

にへらっと笑うニア。

後で後悔するかもしれないが今じゃないなら良いだろ？

「……じゃあさ、ニア。ニアと仮契約って出来るのか？」

「……えっ？」

表情が固まるニア。うわぁぁぁぁもう後悔した！　言った瞬間後悔した！！　５秒前の俺は死ねっ！！！

死んでるわ、俺。つーか言った瞬間後悔するって気付けよ！

「な、なんでもないよ！？　じゃあもう送ってもらって良いよ！？むしろ早く送ってください！！」

早くこの場から消え去りたい。やばい。もう何を言っているのかも分からない。

「……えへへへ、そんなこと言われたの初めてだよ。じゃあまた後でね、ハジメちゃん」

「え？」

ニアの言葉を理解できないまま辺りが光に包まれる。真っ白の空間で俺が最後に見、感じたものは、目を閉じたニアの少し赤い顔のドアップと、柔らかい何かだった。

第1話　ネギまの世界に着いたみたいだ

光が収まると、見たことのない部屋にいた。どこだ、ここ？　てゆーか、俺さっき……。駄目だ、思い出したらめっちゃ恥ずかしくなってきた。でも、あんな美少女とキスしちゃったんだよな。……ニア、可愛かったなぁ……。

「呼んだー？」
「うおわぁっ！！？」

突然後ろから聞こえた声に思わず情けない声が出る。咄嗟に振り向いたそこには――。

「……ニア？」
「そだよーハジメちゃん。さっきぶりー！」

満面の笑みを浮かべ、片手を上げながら元気よく挨拶してくる。え？

「え？　なんでいんの？」
「ハジメちゃんが呼んだからだよー」
「いや呼んでねーけど」
「あれれー？　おかしいなー。ハジメちゃんが名前呼んでくれなきゃ出てこれないはずなんだけど」
「……何の話だ？　ここはどこだ？　もうネギま！の世界なのか？」

いきなり知らない場所に飛ばされた挙げ句驚かされて混乱中。説明を求む。

「えーとねー、先に言っておくとここはもうネギま！の世界だよ。んでんで、現在僕は君との仮契約カードの効果によって現界しているの。もう一人の僕を、ハジメちゃんが名前を呼ぶことで生み出す仮契約カード。その名を『天使の祝福』。

本来僕はあの世界の存在だから違う世界には行けないし行く気も無かったんだけど、今まで関わってきた人って僕のこと能力くれるＮＰＣみたいにしか見てくれなくて正直辛かった。だから君が僕を求めてくれたのが嬉しくてついやっちゃったんだ☆

向こうの僕とは感覚が繋がってて、こっちでしたことは全部向こうの僕に伝わるよ。

ちなみに僕のスペックだけど、君が生きている限り不死、身体年齢変更可、君にあげた能力の使用権利所持って感じだよ。つまり君が望むならロリ、熟女プレイも出来る。やったね！」

「やったね！　じゃねぇぇぇぇ！！」

――スパーン！！

親指を立てにこやかに言い切ったニアにハリセンで突っ込む。よく分かんないけどいつの間にか持ってた。ファンタジーの世界にやって来たんだと実感したが、こんなことで実感したくなかった。

「……ハジメちゃん、良いツッコミだね。伊達にＬＶ２５５まで育ってないね」

「あ？　どういうことだ？」

「あれ、説明してなかったっけ？　ごみんごみん。ちょっと目の前にメニュー画面があると想像してみて」

なんというか非常に想像しづらかったが、ＳＡＯよろしく何とか想像（妄想）すると目の前にメニュー画面が出現した。

「それがハジメちゃんのメニュー画面だよ。見て分かる通り今のパーティーはハジメちゃんと僕。これから仲間が増えればそこに随時更新されるよ。まぁ仲間といっても曖昧な定義ではあるけどね。仲良くなってよく一緒に行動するようになったら載ると思えば良いんじゃないかな。
ちなみにステータス画面とは言っても個人情報とかは載らないよ。あくまでも簡単なメニュー画面でしかないからね」

……スリーサイズなんて期待してないよ、ホントダヨ。

「そんでね、そこで出来るのは装備変更とアイテムの具現化、アイテムクリエーション、あとは術技の確認かな。術技に関してはＯＮ／ＯＦＦの設定も出来るよ。修業くらいしか使い道はないと思うけど」

へぇー、なんか感心すると共にｗｋｔｋだ。……ん？　アイテムがシリーズ通して揃ってやがる！　しかも∞だし。

「あ、気付いた？　２作だけじゃつまらなかったからシリーズで揃えたよ。それに伴ってハジメちゃんもそれらの術技を使えるようになってる。まぁちょっとしたお遊びって感じ。
ちなみにそこにはここの世界の物も入れられるから、基本手ぶらでオッケーだよ。秘匿するためのカモフラージュは必須だけどね。リュックとかさ。
装備画面・アイテム画面のショートカット設定っていうのは念じれば設定場所に具現化されるって機能だけど、各部位１つずつ、手持ち袋にはその袋の容量までって制限があるからね」

それでもショートカットできるのはでかい。流石に戦闘中にメニューは開いてられないからな。

「肝心の戦闘スキルだけど、セーブデータがそのまま経験値になるよ。簡単に言えばセーブデータにいたパーティーメンバー全員の経験を継承できるの。もちろんキャラが育ってなかったり未消化のイベントがあれば反映されないよ」

結構すごいことなんじゃないのかそれ？　うぉっ、頭ん中何か入ってきた！！

……すげぇ、忘れていたことを思い出した感じだ。つーかこれ負けないよな、マジで。

「説明はざっとこんなところかな。何か聞きたいこととかある？」

聞きたいこと、ねぇ……あ、そういえば。

「ニアってさ、俺に名前呼ばれなきゃここにいなかったわけだよな？　なんでそんな回りくどい条件にしたんだ？　下手したらいつまでも出てこれなかったんだぜ？」

そう、ニアがこっちに出てくるための条件。それが気になったのだ。普通に考えれば一緒に来りゃいいじゃんという話で。

「ふっふっふ、良くぞ聞いてくれました！！　何故その条件にしたか。順を追って説明していくよ」

え、そんな複雑な話？

「まず、僕とハジメちゃんはキスをした」

う、恥ずかしいこと思い出させんなよ。

「しかしハジメちゃんはその瞬間に世界移動してしまった」

そうそう、思考が止まったままだった。

「そして次の瞬間ハジメちゃんはこの場所にいて、当然困惑する」

そうだな、どこなのかすら分からないからな。

「そして少しずつ冷静になり、今までの流れを反芻する」

うん、その通りだ。

「自室にいたところから始まって、よく分からないけど死んじゃったってことなんかを頭に浮かべつつ、最終的に僕とのキスに行き着く」

うん……ん？　二度目だぞそれ。

「僕の唇の感触を思い出し、唇を指で触りながら、トリップ気味の思考で『ニａ「言わせねぇよ！！？」』」

――スパーン！！

本日二度目のハリセン。どうしてこうなった。

「う～～、痛いよハジメちゃん」

頭をさすりながら半泣き上目遣いのニアさん。……畜生、可愛いじ

ゃねぇか！

「まぁ、条件についてはそういうこと」

「悪趣味だなおい！！」

「あ、大事なこと忘れてた。ここは麻帆良学園の敷地内で、ハジメちゃんは僕と一軒家に2人暮らしだからね。いつでヤれるよ！」

「……。はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！？　いやお前意味わかんないから！！　何で2人暮らし！？」

「ほらーあれだよ幼馴染ってやつー！」

――ピンポーン――

そんな微妙に噛み合わない会話をしていたその時、どこからかチャイムの音が響いてきた。誰か来たのかなと思ったが、何分この家の間取りを知らないので応対できるわけもなく。ニアに顔を向けると俺ににこっと微笑んでから部屋を出て行った。見送りそうになったところで我に返り後を付いていく。はーいと言いながらニアが玄関が開けると外にはギターケースを担いだ褐色肌の女性が立っていた。わお、龍宮真名さんじゃないっスか……。背ぇたけー。胸でけー！

「やあ2人共。なにやら大声が聞こえてきたが何かあったのかい？」

「ううんー、何にもないよー」

「そうかい？　ならいいんだけどね」

先程の俺の声は外まで響いていたらしい。恥ずかしい……。

「さて、もう時間も押してるしそろそろ行こうか。世界樹広場は少し遠いから今から出ないと間に合わない。刹那も門の所で待ってる」

「そうだねー。さぁハジメちゃん、行くよー！」

「お、おぉ…」

何か分からないがこれから世界樹広場に集合らしい。俺、流れについていけないんですが。

しっかりと玄関を施錠してから家から出る。家は外れの方に建っているようで周りに建物は見受けられない。ふと振り返ると2階建ての結構しっかりした木造建築物が聳え立っていた。……え、家でかくね！？　2人暮らしだよね！？

驚愕する俺を置いて2人はさっさと歩いてしまっていたので、若干の虚しさを振り払うように走って追いつく。庭も車5台くらいは停められるな。……いらん基準だな。

「お待たせ、刹那」

「いや、大丈夫だ。じゃあ行こうか」

門の横で壁に背をもたれて待っていた竹刀袋を担いだ少女、桜咲刹那と合流し、世界樹広場へと歩き出す。刹那たん可愛いよはぁはぁ――――。

「……何この状況」

「いや、何か背後に不穏な気配がしたものでつい……。すまない」

「左に同じ」

邪な考えが頭をよぎった瞬間、前を歩く刹那と真名に得物を突き付けられた。超こえー！！

『……変態』

頭の中にニアの声が響いた。なるほど、これが念話か。……何で

バレたし。

『言い忘れてた。今日の日付なんだけど、２００２年9月1日、僕達は中学2年生だよ。僕達はつい最近ここに来た転校生で、これから魔法関係の顔合わせだよ。真名と刹那には来園時に案内をしてもらって、今も面倒見てもらってる感じ。ハジメちゃんも既に2人とは下の名前で呼び合う程度は仲良くなってるよ。

今学園のＭＡＰ情報を送ったから、道に迷うことはないと思う。見てもらえば分かると思うんだけど、形式はＳＯ３のＭＡＰで、さらに特典でパーティーメンバーは色付きの点で表示されるよ』

『そうか、助かる。でもそういうことは事後報告よくない』

別に貶してるつもりはないんだが、こいつ追加情報多くないか？

ちなみに念話のやり方はさっきのダウンロードで一緒に頭に入ってた。

「これから一とニアの裏の顔合わせか。恐らく手合せみたいなことをするだろうから楽しみだよ。身のこなしからして、2人の実力には興味があるからね」

「私もだ。出来れば実際に手合わせしてみたい」

「そうなればおもしろそうだねー！」

逸る気持ちを抑えられないといった風の2人。そんな食いつくほどのもんなのかしら。そんな考えが頭をよぎるがニアと一緒に笑い合っているところを見て、単純に仲良くなったからだと納得する。例えるなら「なぁなぁ、お前どんくらい強いの？」とかそんな感じだ。

「しかしなぁ、女の子相手って戦いづらいんだが」

「それは男女差別だ。今時流行らないよ」

「そうだぞ、私にも真名にも矜持があるんだ」

経験としての戦闘は確かに体に浸透しているが、俺自身が行った訳じゃないから抵抗がある。そう思ってつい口に出してしまったが、それは侮辱でしかないんだよな。

「そうだな、すまん」

「ハジメゃんはフェミニンなんだよー」

「その略し方は語弊があるだろ……」

４人で話しながら広場へと向かう。自然に会話できてることに我ながらちょっと驚き。漫画読んで人となりはある程度分かってるからだろうか。しかし手合せか……。さっき見たステータスは確かにＬＶ２５５だったし、こっから更に上がるらしいし、正直装備無しでも勝てる気がしてならん。あ、でも装備外すと防御が低すぎるか。歩きながら装備画面と睨めっこ。とりあえず相手によって装備を変えればいいかな。

そうこうしている内に広場へと着いた。既に大勢集まっている。俺達で最後だったかな？

「ふぉふぉふぉ、噂をすれば何とやらじゃな。これで全員揃ったようじゃし、早速始めるとするかの。

一くん、ニアくん、ここに」

「「はい」」

広場の中心、一番高い所に立つ学園長に名を呼ばれ、俺とニアは同時に足を踏み出した。

第2話　顔合わせからの模擬戦だってよ

学園長に呼ばれ広場の中心へと向かう。魔法先生、魔法生徒達からの様々な視線に耐えつつ、学園長の所まで歩いていく。近づいていくにつれ大きくなる学園長の姿。……とりあえず、頭のことは触れないようにしよう。直に見るのは目に悪い。というか指差して叫んでしまう。高畑先生は学園長の後ろに控えていた。階段を上り切り2人の近くまで行くと皆と向き合うよう指示された。あー、緊張する。人前に立つのは苦手だ。

「さて、今日皆に集まってもらったのは他でもないこの2人の紹介の為じゃ。男の子が高橋一くん、女の子がニア・レストくんじゃ。2人共良い子じゃから、皆良くしてやってくれ」

「高橋一です。よろしくお願いします」

「ニア・レストです。よろしくお願いします」

うわ、声ガチガチ。震えそうになるんだけど。ちらりとニアを見遣ると正しく天使の微笑みを浮かべていた。流石天使、こんなことでは動じないか。……にしてもそれ、ニコポ狙ってんの？

「うむ、挨拶はこのくらいにしてこれから2人の実力を見てもらおうと思う。誰か手合わせしたい者はおるかの？」

「では私と刹那が」

真名が名乗りを挙げる。ちょ、おまっ、立候補すんじゃねぇよ！……なーんか他にもうずうずしてる人がいるんだけど―（斜め後ろの髭メガネとか）、どうなるんだろ？

「ふむ、真名くんと刹那くんか。良かろう。やってみると良い」

「「ありがとうございます」」
「では、４人は下に降りとくれ」

何の異論もなく対戦相手が決定。広場の中腹へと足を進める。つーかホントにこいつらとやるのかよ。やっぱ抵抗あるなぁ。

「ハジメちゃんは前衛ね。好き勝手やって良いけど、本気でやっちゃダメだよ？」
「りょーかい」
「一、本気で行くからそのつもりで頼む」
「マジっすか」

刹那の本気ってどんなやねん。にしても、戦闘スタイルはどうしよう。……よし、フェイト・ラインゴッドでいくか。武器はプロテクトかけたインフェリアソードで良いかな。防具は痛いの嫌だからヴァリアントメイルでいこう。
ちなみに、防具に関しては装備しても具現化されない。何故か？
ゲーム会社に言ってくれ。つーかバーニィシューズとか具現化されても困るわ。

「４人共準備は良いかの？
では、始め！」

始めの合図と同時に真名からの先制弾が飛んで来るが、それを剣で弾く。おぉ、マジで体が動く。弾が見える。
……チートだよな、初戦でこんな冷静に状況を把握できるんだから。つーか真名、どんな弾か知らんがいきなりヘッドショットとはどういう了見だ？　そう思っていながらも体は動いていた。だからこそ体勢を低くしつつ突っ込んできたものの、弾を弾くという予想外の動きに一瞬意識が乱れた刹那に向けて右手で刺突を放てるわけだ。

刹那は一瞬反応が遅れたものの落ち着いた動きで太刀を動かし、刺突の軌道を外側に逸らしつつ踏み込んでくる。懐に攻め込まれかつ刺突が迫っている俺に躱す以外の手段はなく、空いた左手で太刀の腹を押しつつ斜め後方へ飛ぶ。下がった俺に対し刹那はさらに勢いの乗った切り上げを繰り出してくるが、俺もそれには剣で弾く余裕があった。よしここから反撃だと踏み込もうとしたものの、事もあろうに刹那はニヤリと笑って斜めに方向転換、ニアへと突っ込んでいく。おぉぉい、本気でやるってそういうこと！？

刹那を抑えようと慌てて振り向き、後を追わんとした瞬間に嫌な予感。前に出していた右足を無理矢理蹴り上げ、左足で地面を蹴り体を強引に後ろへ飛ばす。コンマの差で踏もうとしていた地面に銃弾が埋まり、頭のあった所も通過していった。着地しつつ振り向くと真名がライフルのスコープを覗きながら口角を吊り上げていた。ちっ、連携が上手いな。

『ハジメちゃんは真名をお願い！』

聞こえてきた念話にその場から飛び退くことで追撃弾を避けつつニアへ顔を向けると、まさに刹那がニアに向け刀を振り下ろすところだった。振り下ろされた刀に合わせて、ニアが半身になりながら左手を振り上げる。服の上から腰に巻いた3つのベルトから、両手首の腕輪に緩く垂れながら繋がり、腕輪から下に垂れ下がっていたケープがその動きに釣られて刀へと向かっていく。ケープは刀に触れても切れずにそのままぐるぐると絡まり、直後ケープから光弾が全方位に発射される。流石の刹那もケープが切れず、かつ光弾が発射されるなど予想できなかったのだろう、被弾し仰け反るも大して効いていないのか後方へ大きく距離を取る。心配はいらなそうだがニア、お前それエンジェリックケープじゃねーか。最強武器だろ自重しろよ！

……さて、俺もそろそろ真名とデートと洒落込みますかね。

俺が振り向くと同時に真名は足元に置いてあったギターケースを蹴り、中から飛び出してきた二丁拳銃をライフルから持ち替える。ライフルのスコープから目を離していたことからどうやら彼女もニアの防御光弾に呆けていたらしい。真名が俺の腹目掛けて弾を撃つのと、俺が斜め前へと走り出すのは同時だった。弾が外れても次をきっちり繋げてくる卓越したスキルは流石だ。トリッキーな動きで照準を外させようとする俺をきっちり捉え、かつ先読みしながら撃ってくる。だが俺もその銃弾を避け、あるいは弾きながら距離を詰める。

この手合わせに限っては真名は非常に不利だと言っていい。何せこの広場から出られない上に最初から姿を露見してしまっている。故にスナイパーとしてではなくガンナーとして対峙している訳だが、目に見える範囲からなら回避も容易い。なんたって今の俺はフェイトだ。レーザーガンとか避けまくってるんだから拳銃には負けない。……と思う。

にしてもなーんか視線を感じる。数は3つ。2つは……木の上か。もう1つはよく分かんないけどかなり距離がある気がする。

「ぐぁぁぁぁあああっ！！」

「「……」」

刹那の悲鳴に2人して一瞬そちらを見遣る。……うん、見なかったことにしよう。

縦横無尽に駆け回り、牽制を混じえつつ連射される銃弾の嵐を掻い潜り、距離を広げようと動く真名に徐々に接近していく。そして遂に真名を射程圏内に捉える。胸部を狙った右の銃弾をダッキングすることで躱す。さすがにこの距離で下への回避はないと踏んだのであろう左手は俺を捉えてはいない。絶好の好機！！

「はっ、たぁっ、はぁぁぁっ！！」

掛け声と共にブレード・リアクター発動。1撃目斬り上げ、予想以上の剣速に若干の動揺が見られるも半身になって回避される。2撃目カウンターを狙ってきた銃弾を切り裂きながらの振り下ろし、先程よりも余裕はなくなったが半歩下がることで回避される。3撃目渾身の刺突！！

「ぐっ！？」

バックステップで安全に回避し、事後硬直を狙おうとしたようだが甘い。剣先から飛び出した衝撃波をもろに食らい、宙に浮いていた真名は大きくバランスを崩した。

体勢を立て直す時間は与えない。瞬時に距離を詰め、無理な体勢からでも正確に腹部を狙う銃弾を剣で弾き、脚を狙った銃弾は左の手甲で殴りながら懐へ潜り込むと同時に剣を真名の顔すれすれに投擲、剣に視線と意識が流れた真名の右手の銃を下から殴り飛ばし、左手首を掴み背後に回りながら捻り上げ銃を落とさせ押し倒す。下がアスファルトだし、何より女の子相手にやりたくはないが、押し倒しながら上半身を真名の背中に乗せ伸ばした足で右手を踏んだ。ついでに腰に差した短剣を抜き首筋に添える。

「どうする？」

「……降参だよ。

だけど一、こんな人前で私を辱めるなんてとんだ変態だね」

「どうしてそうなる！？」

蠱惑的な笑みを浮かべる真名から咄嗟に距離を取る。狼狽しつつ回りを見ると俺の動きから察したのかニヤニヤしていたり、先ほどの光景から顔を赤くしていたり憐れんでいたりと様々だ。真名を組

み伏せた後、体勢的に耳元で喋るしかなかったから遠目かなり危険かもしれないが……。知らず知らず頭を抱えていた。

「さて、とにかくこれで手合せ終了だね」

声のした方に顔を向けると、いつの間にか立ち上がった真名が俺に向かって微笑んでいた。

ふふん、驚いてる驚いてる。ただのファッションだとでも思ったのかな？　これ一応殴ったら岩を軽く砕くくらいの性能持ってるんだけどなー。まぁいっか。距離も離れたし今度はこっちから攻めるぞー！　今の僕はスフレ・ロセッティ、「幻惑の妖精」なんだから！

「えーい！」

「なっ！？」

超高速でルアーを伸ばし敵に引っ掛け巻き取ることで、敵を引き寄せたり自ら引っ張られて相手に特攻したりするバトルスキル、「ビヨーンド・ルアー」。一瞬で伸びたルアーは硬直している刹那をしっかりと搦め捕った。初見ではまず避けられないと思うし、実際刹那も動けない。引っ張られてきた刹那に対しスキルキャンセルでパパパ・スプラッシュを発動させる。

「ぐぁぁぁぁあああっ！！」

その場でくるくる回りケープを振り回し、その先端に付いている天使と悪魔の人形一（とにかく硬い）による物理攻撃と、技の発動と同時に発生し、発動者を中心に渦巻き状に回転していく大小様々な無数の黄色い星型衝撃波での攻撃が多段ヒット。宙へ弾き飛ばされる刹那。さらにここでダメ押しのドキューン・ブラスト！

「がはっっっ――」

右手で形作った銃の照準を刹那に合わせ、その指先から発射された無色弾が刹那に被弾。その衝撃でさらに上空へと宙を舞った刹那は放物線を描きつつ落下、受け身を取ることなく地面に叩き付けられた。

……うーん、やりすぎちゃったかなぁ。でも一応威力は抑えたし大丈夫だよね！……とりあえず刹那を回収しよっと。

真名の笑みに一瞬呆けてしまったが、すぐに俺の後ろに焦点がいっていることに気づく。視線を追って振り向くと刹那とニアが歩いて来ていた。……刹那がなんかボロボロだ。表情も悲壮感漂ってる。ニアが治したのかケガはないみたいだけどな。ったく、俺に言う前にお前が自重しろよ。当のニアは……怒ってる？　何故。

「ハジメちゃん」

「……はい」

「何してたの？」

「何って真名と手合わせして「興奮して押し倒しました」ちょぉぉ

お！？」

このタイミングで真名さん何言ってくれやがるんですか！？　もうちょっと考えようよ！！

「ハジメちゃん！！　エッチならまずボクとしなきゃダメ！！！」
「はぁ！！？　お前何言って――」
「一。私が負けたことは事実だ。この体、一の好きにするといい」
「ちょっ！！？」
「ままま真名！？　なな何を言ってるんだ！！？」
「冗談だよ」

釈明すら許されない俺に意味不明なことを口走りつつ詰め寄るニア、あわあわとテンパってる刹那にあくどい笑みを浮かべる真名。畜生、さっきの微笑みはこれを狙ってたのか！！！！

「ウォッホン！！　お楽しみ中の所悪いが締めさせてもらっても良いかの？」
「っ！！？　はっ、はいっ！！」

やっべぇ……、周りが見えてなかったよ……。もう今すぐお家帰りたい。視線が痛い！！　ニアも真名もよくあんなこと言って普通でいられるよな……もはやこえー。
俺と刹那は顔を真っ赤にして俯いており、ニアはそんな俺の腕に絡み付き、真名は普段通り立っている。畜生、離れてほしいのにほしくない！！

「……。さて、先の手合わせで分かる通り、２人共かなりの手練れじゃ。見慣れぬ戦法に驚いた者もいるかもしれんが、それは隠れ里で育ったが故の特有の技法じゃとしか言えん。隠れ里と聞いて

警戒するかもしれんが、この子達の身柄及び信頼性はワシが保証するものであり、よってそれらの件で余計なちょっかいをかけることは禁止とする。よいな？
２人には明日から警備のシフトに入ってもらうことになる。皆も２人に負けんよう日々精進を重ねい。以上、解散！」

学園長ですら憐みから場を流す程の裏の顔合わせが終わった。予想を遥かに突き抜ける疲労度だった。主に真名のせいで。
ありゃ、木の上で見てた２人は帰ったみたいだ。もう１つの気配も消えたな。まぁ気にしても仕方ないか。

「それにしても、ニアの戦い方には驚かされたよ。見たことのないものばかりだった」
「んー、学園長も言ってたけど特殊なものなんだー。あとは秘密ー！」
「一もかい？　刹那の神鳴流に似たものや暗器のようなものもあったが」
「そうだな、まだ秘密だ」

結局何も分からない返答。神鳴流という単語に大層興味をそそられたらしい刹那ははぐらかされて不満そうだったが、それ以上何も言わなかった。真名はまだと言った意味を理解したのだろう、気長に待つと言ってくれた。う～～～～。ニアと真名はともかく、なんで刹那ももう普通に会話できるんだよ。俺が気にし過ぎなの？

そっからは４人でだらだら歩いて、家の前。

「ふぅ、やっと着いた。じゃあ刹那、真名、また明日な」
「おやすみー！」
「あぁ、おやすみ」

「おやすみ。……そうだ一、ちょっといいか？」
「ん？」

真名に手招きされ近付く。耳元に顔を寄せられドキッとする。

「さっき言ったこと、1分くらいは本気だよ」
「んん？　……はぁっ！？」
「ふふっ、じゃあね」

言いたいだけ言って真名は歩いて行った。刹那も首を傾げながらも真名を追う。

「ねー、真名なんてー？」
「いや、何でもないよ。あー疲れたー」
「えー、何それー！」

さっきのって、やっぱアレだよな？　ったくあいつ、最後の最後まで掻き回していきやがって……。まぁからかってるだけだと思うけど。つーか一分ってなんだよ。1%じゃん！　もはや0じゃん！

「なぁ真名、一になんて？」
「あぁ、押し倒された仕返しをしておいた」
「はぁ…？」

訳が分からないといった顔をする刹那。正直、自分でもなぜあんなことを口走ったかよく分からないんだけれどね。人をからかうのは好きだが、自分をネタにすることはまずない。ましてやあんな直接的な表現など……。

私が圧倒されるなんて何時振りだろう。本気ではないし様子見ではあったが全力でやった。にも拘らず初撃を弾かれ、不意打ちを躱され、あまつさえ一度も被弾させられなかった。

私に向かって来る時の真剣な表情、接近時の私へのダメージを考慮した絶妙な力加減。……ふっ、らしくないな。全て君のせいだぞ、一。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6604z/

天使と一緒にネギま！

2011年12月24日05時47分発行